

第十四章 堀河館の冬 — 義経出陣

京の息を呑むくらいに美しい紅葉が終わって、嵐山の鴨川に都鳥が飛来すると、寒さが急激に増してくる。都の冬の寒さは格別である。河越の比ではない。夜になると底冷えがして、重ね着をしても震えがくる。

郷子の堀河館での生活の居場所も定まり、役割も少しづつ体に馴染んできた。下僕や下婢が正室である郷子の指示を求めてきたし、そのうち侍女や下級武士も家事については、郷子の意見を求めることが多くなってきた。これは、河越館での経験がとりわけ役に立った。父の重頼は、東国に戻りいまは鎌倉と河越の間を行き来しているようだ。しかし、兄の小太郎重房は、義経の陪臣として都にある宿舎にまだ残っていて、いろいろ相談に乗ってくれるから心強い。

一時硬直していた源氏と平家の戦局は動き出していた。

間諜からの報告によれば、屋島に腰を落ち着けた平家は、畿内、四国、鎮西でしきりと兵を募っているらしい。

鎌倉に現況を報告する範頼の伝令が京を通る際に聞いてみると、頼朝から平家追討の命令を受けた範頼は、数万の大軍を率いて山陽道を進軍して行くも、兵糧難で苦労しているとのこと。後方補給網が出来ていないうえ、大干ばつで行く先々で食料の調達が出来ないから、将も兵も毎日が食うや食わずで飢餓の状態にある。従って、戦意もあがらず、ひもじさに耐えかねて故郷に帰る事のみを願い、ついには軍を脱走するものも次第に増えてきているという。範頼軍の軍監の和田義盛でさえ、「坂東に帰りたい」と弱気を吐いているらしい。腹が減っては戦は出来ないのだ。

義経は、検非違使として都の警護にあたりながら、このような伝令からの情報を得ると、腹が立つらしい。いらいらとしてつまらない事で家来を叱ったり、物に八つ当たりしたりしている。

静御前は戦の事は判らないので、義経は郷子相手に愚痴をこぼすことが多くなった。

「平家の本隊が四国の屋島に居るといふのに何で安芸や周防などをうろついているのだらう。鎮西に渡って何になるのだ。あいつらのやる事は理解不能だ」

「源氏は犬で、平家はカモだ。犬が追っても、カモは水上に逃げるだけだ。犬が陸からいくら吠えても、カモは涼しい顔をしている。これでは、戦にならない。平家は、海戦を狙っているのだから、船を十分に調達しなければならないのに、その様子もない。何をしているのか」

「範頼に、平家追討をまかせていたら、戦う前に源氏の兵が自滅してしまうぞ。」

兄者は、なぜ俺に平家追討を命じないのだらう」

郷子には、猜疑心の強い頼朝の考えが判るような気がする。

（頼朝さまは検非違使任官以降、義経さまを信用していない。法皇さまに取り込まれたように見える義経さまが一の谷の決戦以上の戦果を収めると、その優れた戦争遂行能力が法

皇の命令で頼朝に向かうことを恐れている。だから敢て義経さまを平家追討から外しているのではないだろうか。）

義経は、そういった鎌倉政権の極端に飛躍した懸念に恐らく気がついていない。ただ、長幼の序でまず兄の範頼が平家追討の総大将に選ばれたと単純に考えているようである。

郷子は、頼朝の発想を義経にそれとなく伝えたいと思ったが、存外難しいのが判った。[頼朝さまは、義経さまが平家との戦に大勝されるのを危惧されているのです]など、どうして言う事ができるだろうか。

年が代わって、降雪で白一色になった正月には宮中や貴族の間では色々な儀式が行われているようだが、武家屋敷では華やかな行事は行わない。

ただ、悪い鬼や邪気が家の中に入らないように門口に根のある松を飾り、いつもより多少あらたまった祝宴を催し、餅や野菜が入った野戦料理のような雑煮を食するくらいである。

郷子は、正月三が日に都の底冷えのする寒さに風邪を引いて、微熱が下がらず、褥しよねに横たわった。祝宴の賑わいが聞こえてくる。静御前は、祝いの舞を披露している様だ。舞が終わると賞賛の拍手と歓声が聞こえてくる。食欲がなくなり、志乃に薦められて無理に食べると吐き気に襲われた。なかなか疲労感がとれない。体力には自信があったのでこのような体調不良は初めての経験だった。

（きっと、いままでの気苦労と緊張感で溜まっていた疲れがどっと出たにちがいないわ）

郷子は、最近はこの堀河館の暮らしにも慣れ始めたと思っていたから意外な感じがした。

志乃は、そんな郷子の世話をしながら、さりげなく訊いてきた。

「月のものは、おありになりますか」

「いえ、それがおかしなことにまだ無いのです」

「おめでとうございます」

「なんですか」

「ご懐妊でございますよ」

「ええ、まさか」

「恐らく間違いございません」

郷子は、半信半疑で、手を寝衣の上からお腹の上に置いてみた。ここに、本当にややが出来たのだろうか。いままでの体調不良が嘘のように、体内に力が湧いてくるのを感じた。

潮のような歓喜に満たされ、なぜか涙が溢れてきた。

郷子は、起き上がって志乃ににじり寄ると手を広げて抱きついてしまった。志乃は、姉のように身じろぎもせず郷子を受け止め優しく背をなでてくれる。

（静より先に子供が出来た）

郷子が、初めに考えた事は、このことだった。そして、それが正直嬉しかった。

（これで、本物の正室になれた）

郷子は、周りを見回して、自信がみなぎるのを感じた。

(静にもこの館の誰にも、もう遠慮する必要はないのだ。義経さまなどと他人行儀に呼ばずに、義経と呼ぶことにしよう)

郷子は、心の中に大きな変化を感じたが、しかし、他人に対する今までの謙虚な態度を改めて、驕り高ぶる気はさらさらなかった。

(今まで通りでいい) と郷子は思う。

郷子は、義経に話すのはもう少し待つことにした。

実際に、妊娠していることが、もっと明確になってから話したほうがいいと思ったからだ。そんな折、鎌倉から早馬が着いた。

その後直ぐに、義経が方々に下知を下す興奮した声が聞こえた。

すると堀河館のなかが急に活気つき、緊張して恐い顔になった武士が大声を上げたり、足音高く動き回ったりしている。

郷子は、河越館で経験があるから、何事が起こったのかすぐに判った。

(出陣することが決まったのだわ)

義経が、郷子の居室に顔を出すと、浮かれたような声で告げた。

「兄者から、平家追討の命令が届いた。出来るだけ早く出陣するから、支度をしておいてくれ」

義経の顔は、喜びで輝いている。

郷子は、自分の心がわからぬままにその場の雰囲気と言った。

「おめでとうございます」

「ははは、遅ればせながら、範頼では平家に勝てない事が判ったようだ」

そう言うと、義経はあわただしく部屋を出ると直ぐに姿を消した。

郷子は、志乃に声をかけて、納戸の唐櫃から鎧や兜を取り出そうとしたが、志乃から「いまは大切な時期でございます。お体に障りますから、お休みになってください。私がいたします」と諭されて、横になった。

郷子は、出陣が決まったこの時期に妊娠した事実を義経に伝えたほうがいいのか、伝えないほうがいいのか真剣に悩んでいた。

これも戦の準備に忙しい小太郎重房に相談すると、「それは良かった」と喜んでくれたが、「往往にして、勘違いということもあるから、もっと確信が得られるまで、もうすこし待った方がよい」との助言を得た。

翌日、義経が「法皇に新年のご挨拶に伺候するのだが、お前も一緒に来てくれ」と言う。郷子が同伴するのは、どうやら、法皇の好奇心から出た要請のようだった。

義経と郷子は、豪華な八葉車に同乗して法皇の御所になっている法住寺殿に出かけた。

義経は従五位下の殿上人として立烏帽子に直衣姿、郷子は単衣の上に何枚も桂を重ね、小桂を羽織った重桂姿である。郷子は、着膨れのおかげで寒くはなかったが、衣裳の重さに身動きがとれずに閉口した。

このような法皇への伺候が、鎌倉へ聞こえたならば、痴れ者と謗られそうで気が進まなか

ったが、しかし、法皇の要請であれば断るわけにはいかなかった。

八葉車の中で、郷子が訊いた。

「新年の御挨拶の他に、出陣のご許可を得る必要があるのでしょうか」

「法皇から検非違使に任せられてるのだ。法皇の御許可を得ずに勝手に役目を放棄して、都を離れるわけにはいくまい」

「お許しくさいますでしょうか」

「平家の追討は兄者のご命令だ。とにかく御許可していただきざるを得ない」

義経は、口を結んで決意の程を示した。

寝殿造りの前庭の白砂に綺麗な筵が敷いてあり、義経とその横の後ろに一段下がって郷子が座った。何事にも臆すことのない義経が珍しく緊張している。

(まるで、罪人がお取調べを受けるみたいだわ)と郷子は思う。

義経は殿上人だが、郷子はそうではないので、このような取り扱いをうけるのもいたしかたないのだろう。

階上には、御簾が掛^{みす}けられていて、郷子のところからは中が見えない。

しばらく待つと御簾の向こう側に、誰かが入って胡坐をかいたような影が見えた。左右に居並ぶ公卿が、合図をするので、義経と郷子は、丁寧に平伏した。そのまま顔を上げないでいると、

「苦しゅうない、顔を上げよ」という重厚で深みのある声が聞こえた。

義経と郷子は顔を上げるが、しばらく何の反応も無い。

御簾の向こう側から、鼻歌のようなものが聞こえてくる。耳を澄ませると、どうやら、今様を唸っているようだった。

義経も、自分の方から声をかけてもいいのかどうか戸惑っているようだったが、いつまでもお声がかからないので、

「謹んで新年のご挨拶を」と言いかけると、

「もうよい」との返事があった。

また、今様の鼻歌の他は沈黙したまま時間がたった。

義経は、またどうしたものかと戸惑って堅くなっている。

「判官、都の治安も回復していると聞く。ご苦勞であった」

それを聞くと義経は、屈み込んでさらに低く平伏する。

「ありがたきお言葉、身に余る光榮でございます」

「そこにおわすはそこもとの妻か？」

「御意にござります」

「いくつになる？」

「十七歳でございます」郷子が返事する。

「生国は？」

「武蔵国河越でございます」

「坂東だな？」

「はい」

「婚姻は、頼朝が独断で決めたとか」

「早く身を固めよとの兄者の好意でございます」義経が答える。

「そこもとに対面するや木刀で打ちかかったとか？」

郷子は、驚いた。常盤が「この噂は上は法皇さまから」と言っていたが、嘘ではなかったようだ。郷子は、上気してみるみる顔が赤くなってくるのが判る。

「……………」

「そちが投げ飛ばすと『無礼者。私は義経の正室ですよ』と怒ったそうだが？」

「……………」

「事実か？」

「事実でございます」

義経も困っている。

(あなたが面白おかしく言いふらすからよ)

郷子は、心で思う。

すると、突然吐き気をもよおしてきた。粗相をしてはと必死で我慢したが、こらえられずに懐から懐紙を取り出して口を押さえた。

また、しばらくの間沈黙があって、その間今様の鼻歌が聞こえてくる。

「おめでたのようじゃな？」

「はあ？」

義経は、何を言われたのか判らない様子である。

「おこもとは聞いておらんのか？」

「何をでございますか」

「おこもとの妻は懐妊しておる」

義経は、仰天して郷子の方を振り返る。郷子は、平伏して顔を伏せた。

「事実か？」義経が動揺して郷子に訊く。

「まだ判りませぬ」

郷子は、か細く答える。

「ふふふふ」

押し殺した笑いが、御簾の奥から漏れてくる。

義経が意を決したように言う。

「この度、兄頼朝から、平家を追討するやとの命令を受けました。御許可頂きたく伏してお願い申し上げます」

「はて、範頼軍は、周防まで進軍していると聞いておるが」

「平家の本隊は、屋島に駐留しています」

「船がなくてどうする」

「なんとかいたしまする」

「成算があつてのことか」

「いえまだ」

「驚いた男だな、おこもとは。ところで、検非違使の任務はどうするつもりだ」

「検非違使は、わたくし一人ではございません」

「そんなことは言われなくても判つておる。そこもとを検非違使に任命したわしの命令と頼朝の命令とどちらが大切かと訊いておる」

義経は、ぐっと詰まった。

「父を殺し、母を汚した清盛の平家滅亡は、わたくしの一生の宿願でございます。なにとぞ、なにとぞ、御許可いただきますよう伏してお願い申し上げる次第でございます」

「死ぬかもしれんぞ」

「それは覚悟の上でございます」

「子供ができるのか？」

「武士たるものの定めでございます」

義経は、平伏したまま顔をあげない。郷子も、同じく平伏する。

また、御簾のなかから今様らしき鼻歌が聞こえてくる。

永遠の時の流れが過ぎたかと思われる頃、御簾から不快そうな声が聞こえてきた。

「好きにせい。だが、三種の神器は必ず取り返してくるのだぞ」

御簾の向こうで法皇が立ち上がり足音高く遠ざかっていくのが聞こえた。

「ありがとうございます」

義経は、そう言うと目頭を押さえた。

帰りの八葉車の中で、義経はまだ青い顔をしている。

「お前が妊娠しているというのは本当か？」

「おそらく」

「なぜ、すぐに俺に言わなかった」

「まだ、確信が持てなかったのと、いま話せばご出陣に差し支えるかと考えました」

義経は、それ以上郷子を責めなかった。

郷子の腹の辺りを見ていたがポツリともらした。

「俺にも子供が出来たか」

しばらく黙っていたが、すこししてから、呟くように言った。

「法皇は、俺の出陣を望んでいないのだろうか」

それからは物思いに沈んで一言も話さなかった。

心はもう既に平家との戦の戦術を考えているのだろう。

郷子が、志乃に法住寺殿でのやり取りを話すと、志乃が言った。

「須美殿に聞いた話でございますが、法皇は、必ずしも平家の滅亡を望んでいないとの事でした。つまり、もし、平家が滅亡すると、鎌倉に源氏の武家政権が誕生して幕府が開か

れることが予想されます。それでは、皇室の権限が侵されることになるので、この際平家の力を温存して、源氏に対抗させたいと思っているとか。源氏と平家の力が拮抗していれば、お互いに牽制しますので、皇室の権限が弱まる事はありません。鎌倉の方も、範頼軍が兵糧不足で自滅する恐れのある現状では、平家に敗北するよりはむしろ和解したほうが得策と考える向きもあるとか」

「そうならないように、義経が追討軍の総大将に任命されたのではないのですか」

「いかに戦上手な義経さまでも、海戦で平家に勝つのは無理だろうと」

「それでは、なぜ義経に追討を命じたのでしょうか」

「おそらく、平家との和平交渉を有利に運ぶための捨石と考えているのだろうとのことでした」

恐ろしい考えだった。

しかし、郷子には、鎌倉の大江広元なら考えるかもしれないと思う。

郷子は、手を腹の上に寄せながら、義経とわが子の行く末を案じざるを得なかった。

頼朝の命令は、現在播州に駐留している梶原景時軍の数千騎と合流して、屋島にいる平家の本隊一万二千騎を追い落とせというものである。かなり強引な作戦である。それで作戦については、梶原景時の意見をよく聞くようにとの但し書きが付いている。

しかし、義経は、梶原軍が都に入るのを待ちきれずに、僅か百五十騎程で先に出陣することを即日決めてしまった。小太郎重房もこの中に含まれている。

義経の行粧は、赤地錦の直垂に紅下濃くれないすそごの鎧、半月の付いた兜に黄金造りの太刀という華やかさである。

出陣に際しては、静御前のほか酒宴に参加していた多くの女房が見送りに来た。

郷子が見ていると、静がお守りのようなものを義経に渡そうとしている。

義経はそれを受け取るのを断ると、静の肩を抱いて何事か耳打ちし、静はいやいやと首を横に振っている。

義経は、静から離れると他の女房たちに手を振った。

女房たちは、口々に声援を送っている。

それから、義経は、周りを見回し、郷子を見つけると、白い歯を出し、かすかに手を挙げて合図した。これで、郷子は、静や他の女房に対する義経の行動をすべて許す事にした。

前日に義経が郷子に残したのは、次の短い言葉だった。

「案ずるな。俺は死なぬ。ややのために自愛せよ」

義経は、法皇から賜った河越黒という秘蔵の名馬に跨ると堀河館を出ていった。

この河越黒は、平知盛が武蔵守だったときに、河越で手に入れた名馬だが、知盛が一の谷の敗戦で船に逃れた際にやむなく手放したのを義経が戦利品とし法皇に献上していた馬である。法皇は、それを義経出陣の餞はなむけとして与えたのである。

法皇の武士に対する対応は柔軟で融通無碍ゆうずうむげである。

郷子には、義経の出陣が理解できない。

(頼朝さまのご命令通り、なぜ梶原軍を待つことが出来ないのだろう)

梶原景時は、石橋山の戦いで敗走した頼朝が隠れているところを見つけ、これが最後と自決しようとした頼朝を機転をきかして助けたという。頼朝は、その恩義を忘れずに、軍監として重用している。

(景時を怒らせる事は、得策ではないどころか、危険なことであるのが、判らないのだろうか)

郷子は、かつて義経から戦略について彼独自の考えを聞いたことがあった。

「戦は、単なる軍兵の数の勝負ではない。巧みな作戦と気魄がまさったほうが勝つのだ。

そのためには、

一 作戦は、自分でたてる。あらゆる可能性を検討した上で、敵が予想もしない奇襲作戦で先制攻撃をしかける。

一 自分が戦の先頭に立って攻撃し自分についてくれば絶対に勝つと軍兵に信じこませる。

一 死ぬことを恐れない。だが一方で自分は絶対に死なないという信念を持つ。

俺は、戦の前にはいつも夢を見る。その夢で、こうすれば勝てると判るのだ」

義経の言う通り、確かに、軍兵の数だけではないところもあるかもしれないが、それにしても、海戦の得意な平家軍一万二千騎に対して、船も無い義経の百五十騎はあまりにも少なく無謀と言うよりほかないのではなからうか。

郷子は、懐妊したいま、義経の身が心配でならなかった。夜も目がさえて眠れないことがある。義経の行動は、須美によって逐一鎌倉に報告されているだろう。だからといって、それを郷子が止める手立てはなかった。

郷子は、義経のために自分に何ができるかを真剣に考えた。

いままで、郷子は、河越館の持仏堂で父親が出陣に際して毘沙門天や阿弥陀如来に念仏を唱えるのをみてきたが、今考えると本気で父親の生死を心配した事がないことに気がついた。しかし、いまは、もし義経が死ねば、自分も死ぬに違いないと思えるほどの恐怖感を感じるのだった。心の中で(誰か助けて)と叫んでいる声が聞こえる。

結局、郷子は、義経の身の安全を必死で祈願するほかには、何もできない事がわかった。

そういう目で都を見渡してみると、都には、驚くほど多くの寺社があった。

郷子が、最初に感じたのは、都には、なぜこれほど多くの寺社があるのだろうという疑問だった。次に、この多くの寺社の中でどこにお参りするのが最も効験あらたかなのだろうという疑問だった

これらの疑問への回答を得るために、郷子は、再度常盤御前を訪ねることにした。

常盤御前には、義経の出陣や身の安全祈願の他、郷子が懐妊した事実も報告する必要があった。

今度も、志乃と一緒に網代車で一条長成の家に出かけていった。寒かったので地味な桂を重ね着はしたが、化粧はしなかった。

やはり、一条長成は、役所に出勤していて不在だった。

（義母は、義経の行動に夫を巻き込みたくないのだろう）と郷子は思う。

以前と同じ部屋に通され、そこから見える庭は、雪で白一色だった。

常盤は、前と同じように化粧もせずに普段着姿で現われたが、雪の白さに相まって、色白の顔が美しかった。

郷子は、新年の挨拶を述べた後こう切り出した。

「義経が、頼朝さまのご命令で平家追討のために出陣いたしました」

常盤は、郷子が義経を呼び捨てにした変化に気付いたようだが、さりげなく言った。

「それは、聞いています。九郎のことは、すぐに伝わるのです」

「法皇さまにもお会いしました」

「それも聞いています。法皇さまが何をされたのか都ではすぐに知れ渡るのです。」

法皇さまが、法皇の命令と頼朝の命令とどちらが重要なのかと迫られたとか」

「義経は、『平家を滅亡させるのが生涯の宿願です、どうぞご許可賜りますようお願い申し上げます』と必死に懇請されました。その真剣で一途な思いが伝わり最後には許可していただきました。義経もほっとしたのか感涙にむせんでおりました」

「初めは、怒っている振りをして、最後には、しぶしぶ許可を出して恩を売る。あの方特有のやり方ですわ。鼻歌をうたいながら、駆け引きを楽しんでいるのですよ」

「そういえば、鼻歌をうたっていたらっしゃいました」

「どんな今様を鼻で歌っていたか御存知かしら？」

「いいえ、良く聞こえませんでした」

「夫に聞いたら、『だるまさんが転んだ』というような歌だったとか」

「それは、きっと私が着膨れしてだるまのように見えたからですわ」

「ほほほ、あの方はいつもそんな調子なのですよ。なにしろ、天皇になる前には、今様が上手いときけば、白拍子であろうと遊女であろうと鬼^{くぐつと}儺子であろうとみんな船に乗せて日暮れから日の出まで歌いあかして、それが百日も続いたというのですから、普通の人ではありません。あまり気にする必要はないのですよ」

「法皇さまは、鎌倉が強くなりすぎないように、今度は、裏で平家との和平を進めようという話もあると聞いて驚いています」

「あの方は、いつも武士団を互いに戦わせて力を奪い、生きながらえてきた人だからその可能性はありますね」

「法皇さまは、平家を憎んでいると思っていましたが」

「法皇さまと清盛との間には、ある時は友好的にまたある時は敵対的に相對してきたそれは長い歴史があるのですよ」

「どんなことでしょうか」

「保元、平治の乱以後、法皇さまは、信仰の世界にのめりこみました。恐らく生死の境を経験されたからでしょう。熊野詣は、もう数十回も行っています。清盛も時々同行しています。清盛は、院の御所・法住寺殿の中に蓮華王院（三十三間堂）を造って法皇さまに寄

贈しました。また一方で清盛は娘徳子を法皇さまの養子にしてもらい高倉天皇に入内させたことで、権力を得て、多くの荘園を保有し、官職を独占し、日宋貿易で巨万の富を得て隆盛を極めます。清盛の専横が目にあまるようになってきたのに反発した院の勢力が鹿ヶ谷に集まって、清盛打倒の陰謀をめぐらせたのが鹿ヶ谷事件です。これに怒った清盛は、法皇さまを鳥羽殿に幽閉しました。それで、以仁王が東国に平家打倒の挙兵を促す令旨を発することになるのですが、その後のことは貴女もご存知でしょう」

「鳥羽殿に幽閉されたことで、法皇さまは怒っているのではないですか」

「怒ってはいるでしょうが、清盛はもう死んでいるし、法皇さまは、それより源氏が勢力を拡大して、朝廷の力が衰退することの方をさらに恐れているのだと思いますよ。なにしろ、清盛の独裁政治で懲りていますから」

「それで、源氏が平家を完全に滅亡させる事には反対なのですね」

「それと、平家に連れ去られた安徳天皇に代わって四歳の後鳥羽天皇を即位させたのだけど、三種の神器がないために正式の天皇と認められないの。それで困って、三種の神器を取り戻すためにも和平交渉が必要と考えているのかもしれないわね」

「義経にも、三種の神器を必ず取り戻すように命じられました」

「戦で取り戻すのは、なかなか難しいのではないかしら」

「義経は大丈夫でしょうか」

「何とか助けたいと思っても、悲しい事に女にできるのは、仏さまに祈る事ぐらいしかないのよね」

「むかし義朝さまが出陣した際には、身の安全を祈願されたのでしょうか」

「わたしは、深く考えないたちだから。いつも豪傑笑いをしていた義朝が死ぬなど考えた事もなかったし、それに、三人の男の子の育てるのに精一杯だったから、それまではあまり深刻に考えたことがなかったの。義朝が死んで、雪の中を子供三人を連れて逃げて、清水寺の境内でもう少しで凍えて死にそうになった時に、あなたもきっと聞いたことがあると思うけど、朦朧とした意識の中で、川の向こう側に綺麗なお花畑が見えて、人が手招きしているの。

それで川を渡ろうとしたら観音さまが出てきて、ここはまだお前の来るところではないと追い返された。それがわたしにも起こったの。嘘じゃないのね。

それ以来、仏さまのことを真剣に考えるようになったわ。そしてその後も色々と不思議な夢を見たから、いまは九郎のことも熱心に祈っている。」

「実は、わたしのお腹にややが出来たのです」

「まあ、早かったわね。それはおめでどう。するとわたしも、とうとうおばあちゃんになるのね。数日前に、小さな子供の手を引いて宮参りをしている夢を見たのだけれど、その子供は九郎だと思っていたけど、きっと九郎の子供だったのね」

「ややのことがあるから、義経に万一のことがあったらと夜も眠れないのです」

「大丈夫。九郎は死なないわ。あの子には、特別な運がついているように思うの」

常盤は、万事に楽天的でおおらかな性格のようだった。

「義経の身の安全をお祈りしたいのですが、都には、寺社の数が多すぎて、何処にお参りしていいか判らないのです」

「わたしも疑問に思って、夫に訊いてみたのだけれど、夫が言うには、都に寺社が多いのは、時の権力者自身が、国の鎮護や五穀豊穰などの現世利益や死後の極楽浄土での生まれ変わりを仏教に求めている事もあるけれど、その他に、権力者に逆らわないように庶民の不安や不満を仏教に目を向けさせて解消したり、全国から集めた豊かな年貢を使って、大きな寺社を造ることによって住民に、仕事と食を与えているのだそうよ」

「為政者の方針によるものなのですね」

「でも、わたしは、それだけではないと思うわ。いまは、末法の世で人が殺し合い、憎しみあい、疫病に苦しみ、貧乏や飢餓のために親が幼子を捨て、子が老親を捨てる地獄のようなありさまでですから、庶民が救いを求めて仏にすがるのは判るような気がするのです」

「確かに、どのお寺を見ても多くの方々が熱心に参詣されていますね」

「貴族から乞食にいたるまで、ほとんどの人が仏さまに救いを求めて祈っているだと思いますよ」

「義経のためにどのようなお祈りをしたら良いのでしょうか」

「知り合いの僧から仏さまのことを教えてもらったのだけれど、東西南北に仏国土があり、そこに人々を導く仏がひとりづついるらしいの。東に薬師如来、西に阿弥陀如来、南に釈迦如来、北に弥勒菩薩だそうよ。

薬師如来は、国家の安泰、五穀豊穰、病気の治癒、安産などの現世利益を得られる。

阿弥陀如来は、西方の極楽浄土にいて、死後人を安らかな世界に導いてくれる。

釈迦如来は、お釈迦さま。悟り（物事の真理）を教えてくれる。

弥勒菩薩は、五億七千万年後にこの世に再来し、釈迦によって救われなかった人々を救ってくれる。

その他に

観音菩薩は、観音さま。誰でも観音菩薩の名を一心にとなえれば、どんな困難な願いも聞いてくれる。

不動明王は、お不動さま。怖い顔をしているけど、それは酷い苦悩のため。

苦しみの全てを救ってくれる。

毘沙門天は、北方の守護神。戦の勝利の神さま。

大日如来は、密教で宇宙の中心にいる仏さま。全ての人を遍く照らしてくれる。

こんなに多くの仏さまがいるのには驚くわね。

だから選ぶのに困るのだけれど、九郎の戦の勝利をお願いするのは、毘沙門天で、無事をお願いするのは、観音菩薩のような気がするの。子供の安産をお願いするのは、きっと薬師如来ね」

「どのお寺にいけば、そのような仏さまに会えるのでしょうか」

「仏像は色々なお寺にあるのだけれども、近くでは毘沙門天は鞍馬寺、観音菩薩は清水寺、薬師如来は醍醐寺が有名ね」

「有難うございます。まずは、清水寺の観音菩薩に義経の無事をお祈りしてまいります」
常盤御前に丁寧に感謝の意を述べて退出した後、堀河館に戻る網代車の中で、志乃に訊かれた。

「いいお話を聞けましたか」

「義母さまが、政治向けの話や仏さまのことに詳しいので驚いたわ。きっとご亭主といつもそんな話をされているのね。ところで、後鳥羽天皇は三種の神器がないために正式に即位できないで困っているらしいわ。だから、法皇が義経に必ず三種の神器を取り戻すように命じなされたのだとか」

「三種の神器だけですか。それでは、安徳天皇は、もう取り戻す必要はなく、死んでもかまわないということなのではないでしょうか」

「そのようにも聞こえますよね」

「判官さまがもし三種の神器を取り戻せなかったらどうなるのでしょうか」

「平家に勝利しても、叱責を受けるでしょうね」

「判官さまは、わずか百五十騎で出陣して、勝つのも大変なのに、その上三種の神器も取り戻さなくてはならないとは、大変な使命を負ったものですね」

「もう仏さまの慈悲に随うより他にありません」

「何処か心当たりは、あるのですか」

「義母さまの話から、清水寺に参詣することに決めました」